
巻頭言

——2009年度の教育研究推進室の取り組みについて

羽 賀 祥 二

教育研究推進室 室長

『メタプティヒアカ』第4号をお届けします。

この1年間、教育研究推進室では、かねてよりの事業を引き継ぎつつ、また新たなプロジェクトにも取り組みながら、仕事を続けてきました。今年度の推進室の取り組みの概要を紹介して、巻頭言に代えたいと思います。

大学院教育に関する継続的な取り組み

大学院教育への実践的取り組みについては、「伝統的に縦割の学問領域をベースに行われてきた履修コースに対して、広義のフィールドワークという方法に立脚する領域横断的な履修プログラムを設けることで、大学院における人文学教育に風穴をあけようとする試み」として、平成18年度からはじめられた「人文学フィールドワーカー養成プログラム」があります。このプログラムは、大学院カリキュラムの共通科目に授業が配置されており、今年度も8科目の演習が提供されました。

このプログラムでは、博士前期課程2年次および後期課程2年次の大学院生のフィールド調査実習に対して、支援を実施しており、今年度も5件の申請があり、すべて採用されました。そのうち4件が海外調査でした。これらの調査とその研究成果については、本報告書に概要が掲載されています。とくに今年度からは、学術振興会特別研究員への大学院生の積極的な申請をうながすために、この支援プログラムへの申請に際しては、特別研究員へ申請した実績をもつことを条件とすることになりました。

こうした大学院生の研究助成とは別に、安全面におけるマネジメントを推進室として作成しておくべきだということから、昨年度、推進室の事務担当の柴田淑枝さんに調査に当たっていただき、すでにその調査報告は『メタプティヒアカ』第3号に「教育研究推進室におけるリスクマネジメントへ向けて」と題して掲載されました。このレポート内容について、第21回ワークショップ（7月1日）で報告をお願いしました。海外調査の際の保険加入、事故処理、事故回避・事故対策マニュアルの作成などについて、柴田さんの詳細な報告と提言がなされました。全学的な対応とも関連しますが、今後の課題を共有することができました。

大学院共通科目「人文学基礎」の開講

大学院教育の新たな試みとして、今年度から教育カリキュラムとして、共通科目「人文学基礎」（前期）が設けられました。学部レベルにおいては、すでに新入生向けに「人文学基礎」が前から設けられており、文学部の学問分野の広さ、深さなどをコース毎に紹介し、大学における学問のあり方に最初に触れる機会とすると共に、秋に実施される専攻分属の参考資料にもしてもらうことを目的としています。大学院での「人文学基礎」は、人文学それぞれの分野における先端研究や分野固有の学問的課題と蓄積について、前期課程入学の大学院生にきちんと理解させること、それによって自らの専門的自覚と研究課題を明確化する契機とすることが、授業の目標だと考えています。また、近年は他大学から文学研究科に入学する院生も増えており、こうした院生に対しては、文学研究科の幅広い人文学研究の内容の一端を理解してもらうという意味もあります。今年度は、木俣元一教授がコーディネートしたオムニバス形式の授業、「記憶と忘却」が提供されました。

大学院教育の国際化に向けて

アメリカの大学におけるFDの現状については、金山弥平教授が10月28日から11月1日までアメリカのヒューストンで開催されたPOD大会に参加され、その成果について第23回ワークショップ（「満足できるFDに向けて——第34回POD年次大会に出席して——」11月25日開催）で率直に語られました。この大会には昨年度は周藤芳幸教授も参加されており、引きつづき教育研究推進室から室員が参加できたことは、推進室のFDに関する理解をより深める機会となっています。

金山教授の年次大会に関する成果報告は、この報告書に載せられていますので、ご一読下さい。

留学生向けカリキュラムの検討への取り組み

名古屋大学がグローバル30の拠点校に名乗りを上げ、それが認められたこともあり、これから留学生の受け入れ数は増加することが予想されますが、そうした全学的な留学生対策とも関係して、文学研究科における留学生教育のあり方について、とくに留学生向けの英語による授業の問題と日本語運用能力の向上という問題を検討するためのプロジェクトを進めてきました。

今年度、推進室では「人文系大学院における留学生向け日英語カリキュラムの開発」というプロジェクトを立ち上げ、総長裁量経費と文学研究科内プロジェクト経費に応募し、両者から経費を認められ、調査活動をおこなってきました。研究推進室の室員に加え、韓国の大学と交流の深い池内敏教授（日本史学）にもプロジェクトに参加してもらいました。プロジェクトでは、他大学における英語による授業の実態の調査、日本語運用能力の向上に取り組んでいる学内外の講師によるワークショップの開催などに取り組みました。実態調査は、国内では大阪大学・東京大学・東北大学・国際基督教大学、国外ではソウル大学でおこないました。また、大阪大学の鄭聖汝先生に講師として来ていただき、第24回ワークショップ（2010年1月8日）を開催し、「留学生の日本語教育向上に向けた取り組みとその課題」と題して講演をしていただきました。留学生の日本語能力の向上に加えて、論文作成の能力を高めるためのカリキュラムの開発とその成果・問題点について、鄭先生の積極的で、アイデア溢れる取り組みを聞くことができました。

この学内外で実施した調査については、総長裁量経費に関する報告書でその詳細を皆さんに知っていただくこととなります。また、来年度から佐久間淳一教授を中心として、「日本語論文作成法」の授業を試行的に開始される予定です。

なお、ソウル大学への調査において、英語による授業の実践とその問題点、留学生教育の内容について、多くのセクションで聞き取りをおこなうことができ、成果を得ることができたのは、池内教授のコーディネートによる所が多く、池内教授には感謝申し上げます。

来年度に向けて

教育研究推進室では、来年度以降の大学院教育の充実、新たな展開に向けて、「日本語論文作成法」というカリキュラムの実践のほかに、留学生のニーズをくみ取りながら、模索を続けていくことになると思います。

また、今後の課題として、成績評価の厳正化のために全学でも議論が始められたGPA（Grade Point Average）の導入をどうするかという課題があります。これに関しては、GPAについての基本的な内容と問題点について理解を深めるために、推進室では第22回ワークショップを開催し（7月29日）、高等教育研究センターの近田正博准教授に「GPA導入に伴う課題と期待できる効果」をテーマに講演をしていただきました。文学研究科内でも、学務委員会での議論が進められていますが、推進室でもFD研修やワークショップなどにおいて、学務委員会とも連携しつつ、この課題について検討の場を設けていきたいと考えています。